

第九十回 史跡めぐり資料（関宿町）

越谷市郷土研究会

木原徹也

関宿町の沿革

千葉県県の最北端、関東平野の中心地関宿町は、昭和三十一年七月二十日、旧関宿町、木間ヶ瀬村、二川村の、一町二村が合併して誕生した。

旧木間ヶ瀬村は、平将門に關する地名や伝説が多く、往時、将門が居を構えた、岩井（茨城県）とは、当時は陸続きであり、交流があったものとみられる。木間ヶ瀬に残る飯塚、武者土、高倉等はいずれも将門に關する伝説を秘める地名である。駒形神社は馬にちを本神社であり、また村名の木間ヶ瀬は、こま（駒）かせ、であり、将門の昔から牧が広ろがっていたと思われ、旧二川村の歴史は鎌倉時代にかさかのぼり、中戸山堂敬寺には親鸞上人ゆかりの浄土真宗の名刹である。寺内の阿弥陀堂に安置されてゐる阿弥陀如来像は、手の甲を合わせた珍らしい合しようの手組で知られてゐる。また、二川地内の、東宝珠花は、対岸宝珠花とは、江戸川南々く前は一つの所であった。この宝珠花は、かつて江戸川を上り下りする乗船客のため発達した宿場町であり、宝珠花の地名も、帆干場、から出たものとの説もある。

さらにこの宝珠花には将棋名人で知られた・関根金次郎の生家と墓地がある。関根金次郎は徳川以来の一代一人の制度を、自分の十三世で終止符をうち以降は実力名人の制に変えたことで良く知られている。関根金次郎の墓石は、棋士らしく、将棋のコマの形をした珍らしいものである。

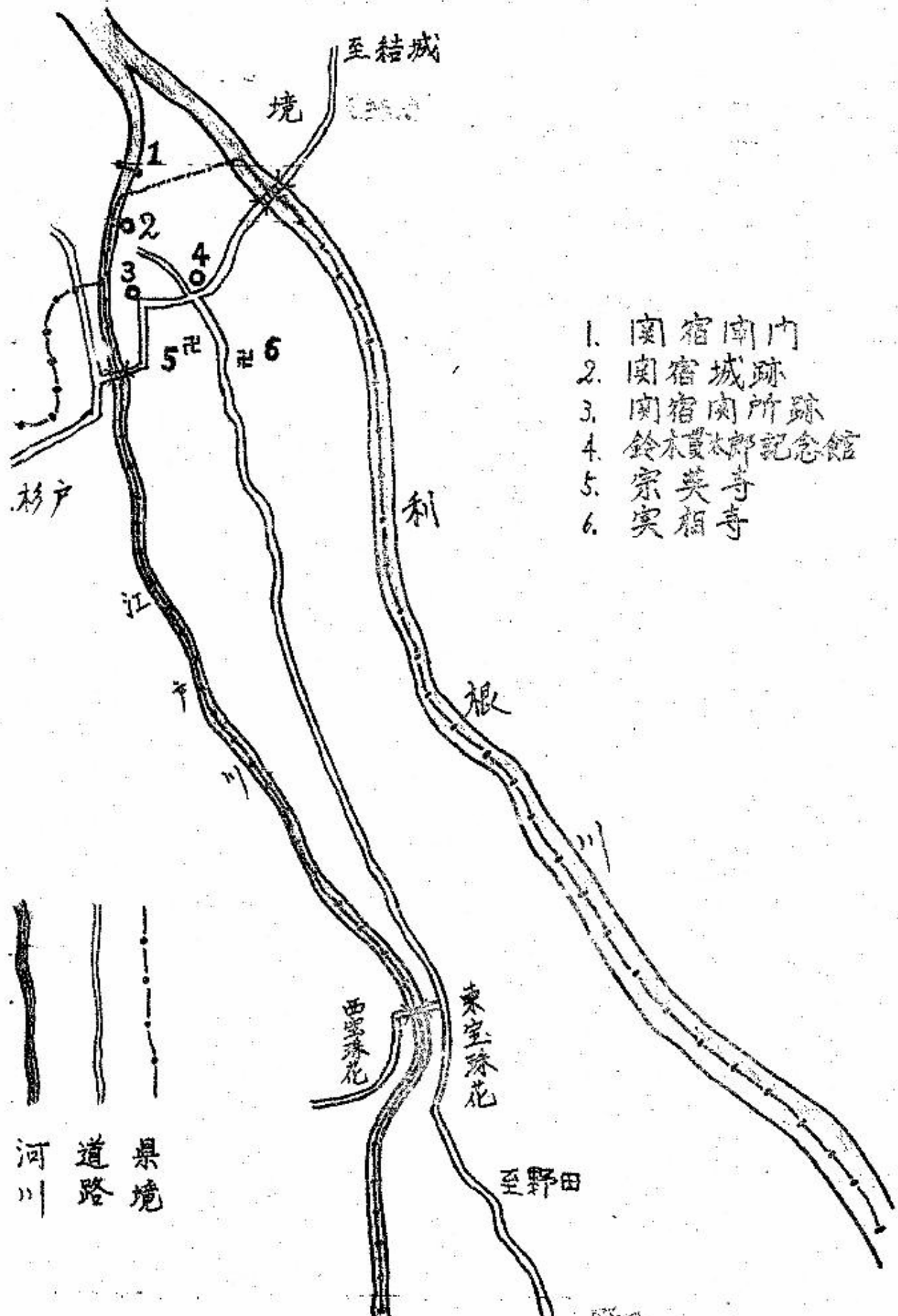
関宿は足利氏時代からの歴史が明らかになる。

足利氏（古河公方）の家臣築田氏が関宿に城（砦）を築いたのが最初といわれている。当時の地形は現在とは大分違っており、湿地や細流が多かったとみられる。




後、利根川のつけ替や、逆川、江戸川の南さくにより関宿は、現在のようになり、利根川、江戸川の分流点に位置するようになった。したがって江戸時代には交通の要所として両川の通船を調べ、川関所が設けられ、所には舟屋舟宿がたちならび、にぎやかを商業の所でもあった。

また江戸時代には、日光街道の脇往還である、日光東道中、か野田市の中里から関宿を通り、結城所を抜く日光に続いており、水陸交通の要所と行っていた。松平康元が天正十八年（一五九〇）に二万石で封じ

られて以降、岡宿藩の城下町として発展を続け、明治
八年、岡宿城とリこわしまで二八五年間、七家、二十二代
の城主を数える。



- | | | | | |
|----|---|---|---|----|
| 1. | 内 | 宿 | 南 | 内 |
| 2. | 内 | 宿 | 城 | 跡 |
| 3. | 内 | 宿 | 内 | 所 |
| 4. | 鈴 | 木 | 豊 | 太郎 |
| 5. | 宗 | 英 | 寺 | |
| 6. | 実 | 相 | 寺 | |

 河川
 道路
 県境

二、実相寺

応永十六年（一四〇九年）の創建。後長祿元年（一四五七）策田河内守成助が閑宿に入ったとき、茨城県猿島郡水海村より移築させたと伝えられる。久世氏代々の香華院で、堂宇広壯、域内閑雅で、特にぼたん園が広く、晩春の南花期に訪れるのが良い。本堂内に久世氏代々の位はいの安置所がある。

庫裡は閑宿城の建物（久世広周が塾居させられた時住んでいた建物。俗に新御殿と呼ばれていた。）が現存している。

山内は唐破風づくりで立派な作である。すぐ右手の鐘楼も屋根の曲線が美しく、今でも時鐘の役をはたしている。

本堂前のソテツの古株はこの地では珍らしい。墓地には鈴木貫太郎、孝雄両閣下の石がある。

二、宗英寺

慶長元年（一五九〇）の創建である。禪宗であり南基は松平康元。参道が長く、だらだら坂になっていく所から、土地の人は長大内とよんでいる。足利晴氏の五輪塔（御所卵塔）がある。左側にヤマト読みとれる程度に晴氏朝臣とあり、その夙化の度合が歴史を語りかけてくれる。

その隣りにあるのが久世藩時代の勤皇家であり経済学者である船橋随庵の墓である。この船橋随庵は幕末、奥宿落し（悪水落し）の事業に着手し、この水路の完成後は内水の被害から救われ、米の増収が図られた。

裏手の墓地に松平康元の墓がある。碑銘は、前因州大守宗英大居士とあり、墓石裏面に松平源朝臣康元とある。

三 鈴木母貝太郎記念館

終戦内閣の総理大臣であった翁の遺品や名画が陳列されている。遺品が意外と少ない感じを与えるのは「見孫のため、美田を買わず」の透徹した心境のあらわれであるともいえる。二・二六事件や終戦時の抗戦軍人に焼打ちされ失ふものが多いかっただけである。

郷土を愛する心が強く総理大臣を退いてからは卒するまで、わずかに数坪の家の中で夫人と伴に起居し、奥宿の地に酪農業を指導し、現在の盛業をみている。

記念館前に立つ「為萬世開太平」の大文字は翁の遺墨を拡大したものである。

四、関宿関所跡記念碑

江戸町にある。この碑の所をまっすぐ堤防に向って歩き、堤防を越え、更にもう一つの旧堤も越え、河原を過ぎると江戸川に出る。そのあたりが昔の川関所があったあたりである。

五、関宿城跡

関宿町の北すみへ(大字久世曲輪)、江戸川堤の一部分のように残っているのが本丸跡である。現在は前後三回に及ぶ江戸川の改修工事により、本丸の跡約六〇坪が三の丸跡とともに残っているはず、大部分が江戸川の河川敷となってしまった。本丸跡には、歴代城主の氏名を刻んだ記念碑が残っているのみである。

関宿城の築城と城主

関宿城は天仁二年（一〇八八）源為義に属して軍功を顕し、
下総国葛飾郡下河辺ノ莊（八条院領）を賜わって下河辺氏の始祖と
なつた藤原行光（下河辺四郎）を始め、その孫行平が治承四年
（一一八〇）源頼朝の伊豆挙兵に参加し、その恩賞として再び下河
辺ノ莊を賜わり、莊の司となつた時、本拠を古河に求め居城とせし
以降、莊内の諸郷村を統治すため、要害の地であつた関宿及び
水海（茨城県香取村）がその支柵として選ばれ、以来一族が築城
して、代々拠つた所と伝へられている。（北条記）

その後、永享十二年（一四四〇）に起つた足利持氏の乱（室町幕
府と関東管領との不和）に際しては、持氏の遺孤春王・安王を奉
じて結城城に挙兵した結城氏朝に相呼応して、関宿城には下
河辺一族が、古河城には野田右馬助が立籠つたのであつたが、
翌嘉吉元年（一四四一）下河辺一族は上杉憲実の敗れ、常陸国
行方郡、真壁郡、筑波郡等の地頭職となつて関宿を去つ
た。後代つて下野国筑田郡の守護取築田満助が足利持氏
に仕え、関宿を領し下河辺氏の旧城を修覆して居城とした。
以降、その子持助は、康正元年（一四五五）足利成氏に属し
て関宿を守り、長子成助また此処に拠つた。この時野田右

馬助は野田城に籠った。永正九年（一五二二）から天文二十年

（一五五二）迄は、足利高基、同晴氏に仕えた高助及びその長子晴助が守衛していたが、天正二年（一五七四）晴助は水海城に

長子持助は奥宿城に在りて、小田原北条氏に對抗する立場を執ったため、北条氏政等の攻め所となり、閏十一月十九日

、遂に両城を捨てて、父子共々宇都宮佐竹義重を頼って去った。その後、持助は天正十五年（一五八七）五月十四日に、晴助は、文

禄三年（一五九〇）に夫々死す。ここに奥宿城主としての築田氏は滅んだのであるが、後年（天正十八年八月）家康の御家人と

なり、木野崎（野田市）に在した一色宮内小輔義直の母は、奥宿城主築田河内守高助の女であった。

以上、天正二年以降、天正十八年七月、小田氏北条氏が滅亡する迄の十六年間に、奥宿城は後北条氏の掌中に歸し、その

の家臣となった築田中務小輔政豊が代って守衛しておいたが、武州滝川城主大石系図によると大石定伴が一時城主となつた模様である。

続いて、同年八月、徳川家康が関東八ヶ国を支配することになったので、各城にはその家臣団が一斉に配置された。奥宿城

には三河以来譜代の家臣松平因幡守康元が入城した。

松平康元 (初勝元、三太郎 因幡守 従五位下)

松平康元が関宿に封じられたときの禄高は二万石である。康元は家康の生みの親、於大の方が、久松佐渡守俊勝に嫁したときに生まれ、子供であり、家康の異父弟である。

康元は小田原の役後は、北条氏の旧城小田原城に移封されている。小田原も関宿も関東の要衝として、その重要度は大差がなかったことかうかえらる。

慶長八年(一六〇三)八月十日卒。年五十二才、法号宗英大興院傑位。基所関宿宗英寺。

康元の子忠良は大坂の役後、五万石となり、美濃大垣に移っている。時に元和二年(一六一六)のことである。

松平重勝

この後元和三年(一六一七)に、松平重勝が封ぜられたが、

重勝は元和五年(一六一九)遠州横須賀に転封されている。

重勝の後には

小笠原政信(初忠貴、若狭、左衛門佐、従五位下)

小笠原貞信(初伊勢松、新五郎、主膳、土佐守、従五位下)

北条氏重(久太郎、出羽守、従五位下)

牧野信成(九衛門、豊前守、内匠頭、従五位下、従四位下)

牧野親成（半右衛門、佐渡守、従五位下、も勤めり従四位下）

板倉重宗（初重統、十三郎、五郎、周防守、右少将、も勤めり従四位上、京都所司）

板倉重郷（新十郎、長門守、阿波守、も勤めり従五位下）

板倉重常（新十郎、隱岐守、も勤めり従五位下）と続いた。

久世広之（三之丞、大和守、も勤めり従四位下）

板倉氏の後、上総大多喜より五万石で久世広之が移ってきて

いる。寛文九年（一六六〇）のことである。広之も名君としての治

績と逸話を数多く残している。三代將軍家光の小姓組に仕

えてからその忠勤に著しいものがあり、老中職にまで進んで

いる。関宿城主となつてからも賢君の名をほしいままにした。

近世関宿藩の藩政が広之によつて整えられたと言つてもよい。

最近では山本周五郎氏の「樵の木は残った」の中に、原田

甲斐の遺言を聞きとり、腐敗幕閣の改革の推進者とし

て書かれている。延宝七年（一六七九）六月に歿している。

牧野氏

久世広之の歿後は五代將軍綱吉の寵臣牧野成貞が

天和三年（一六八三）に入城している。この牧野氏は成貞、成春

と父子二代、二十二年間城主として在城している。

久世氏

牧野氏以降は、明治の版籍奉還まで久世氏が代々城主として善政を布いているので久世氏に因する話題が多いのもやむを得ないことである。

久世氏も広之以降三人の多きにわたって老中を輩出して、幕閣に列している。即ち広之の子、重之、彼は將軍綱吉の前で論語を講義するほどの学者でもあった。次いで広明が老中になっているが、田沼意次の全盛時代のため腕を十分にふるうことができなかった。

久世氏最後の老中は広周であった。嘉永四年（一八五二）に就任している。安政の大獄では、大老井伊直亮と対立抗争して、老中職を辞めさせられている。万延元年（一八六〇）三月井伊大老が桜田内外で水戸浪士に討たれてから、再び老中職にかえりながら、安藤信睦と連立内閣を作り、その中心となり「公武合体」や「和宮内親王」の將軍家茂への御降嫁策を成立させたり、幕府の力を強化するために、陸軍に上栗上野介、海軍に勝海舟の二秀才を登用している。人を見ず目の高かった人ということができぬ。

然し、幕末における政情は猫の目のように変転し、御降嫁策も公武合体策も実を結ばず、逆に罪を向われる形となり、

一文又二年（一八六二）謹慎を命じられ、本城内に新しく住居を作り、かくれ住まふ身となり、罪を解かれることをなく殺している。広周の後を、広文が襲封したが、まだ少年にすぎなかつた。このとき、一万石の減封にあってゐる。広周の謹慎に對する減封である。

十六才の少年藩主に背負わされた幕末の動乱はあまりにも重過ぎた。名家老であり勤皇家である、家老杉山市太夫（對軒と号した）が江戸と奥宿との間を走中、佐幕派の藩士の凶刃にたおれてからは、会津松平容保追討のための官軍の破竹の進撃に抗するには余りにも非力であり、抗命の臣の汚名をかぶり、奥宿城を明け渡す結果となつた。

当時奥宿藩も他藩と同じく勤皇、佐幕の兩派に分かれて、はげしい対立抗争をくり返してゐた。

奥宿藩は、広文以降幕府との関係は厚く、歴代の中から四人にのぼる老中を出してゐたため、他藩の佐幕分子の集りも多く、加えて水利の便がよかつたため、奥東の戦略上の要所でもあつたため、奥西方面からの落人、会津藩からの援軍とその数はおびただしく、かくれあがつた。

特に大島圭介のひきいる伝習隊、土方歳三を主將とする。

新選組の残党をどと、その種別も多種多様であった。これらの者は少年主君広文を拉ちしてでも官軍對抗の旗頭として搦え、士氣を盛りあげたために躍氣をなつていた。

しかし城は官軍の入城するところとなり、広文は利根川を下り、こと約三里の岩井宿の大島圭介の陣屋に仮寝の夢を占すんでいた。官軍は奥宿城より岩井の幕軍に攻撃をかけ、その優勢な火力によってこれを撃退し、広文の救出に成功した。俗に言う、岩井戦争である。

その後、幕軍として参加した藩に対する処分はきびしく、明治八年には城のとりこわしにかかり、明治十年には完全に解体され、その面影は全くをくわってしまった。其の後更に数度に及ぶ江戸川の河川工事により、今は幻の城となってしまった。

城下町、奥宿案内、奥宿町の史跡案内、野田市史料集を参考にした。

関宿城圖

